

# 甲斐家文書に見る狭間村の内部構造

梅野敏明

はじめに

甲斐家文書は戦国時代の狭間地域の歴史を考察する上で重要な史料群であり、現在は大分県立先哲史料館に寄託されている。甲斐家文書の発見時の経緯やその詳細な内容については、『狭間史談』第二号<sup>①</sup>や先哲史料館の研究紀要第五号<sup>②</sup>にて紹介されている。

甲斐家文書を使用した研究として挙げられるのは、大分川を利用した材木輸送と大友氏権力との関わりを考察した鹿毛敏夫氏の「中世の川と水運・治水」である<sup>③</sup>。鹿毛氏の研究以降、甲斐家文書を使った研究は管見の限りでは確認することができなかった。

甲斐家文書の特徴として中世における狭間村の内部構造や大友氏による狩猟の様子がわかることが挙げられ、甲斐家文書を中心にした狭間村の歴史を考察していくことが課題となる。今回は、中世における狭間村の内部構造について見ていきたい。

## 一 「狭間村諸給人」の構成

大友義鑑（大友宗麟の父）が豊後国を治めていた天文一六（一五四七）年頃の文書として、次のものがある<sup>④</sup>。

〔史料一〕大友義鑑書状

（礼紙ウハ書）

「（墨引）」

狭間村諸給人中 義鑑」

金剛宝戒寺材木、今度大水失候分、於方角河辺、流寄候之由申候、当村衆請取之木被見分、河下早々可有馳走候、聊不可有緩之儀候、恐々謹言、

閏七月廿四日

義鑑（花押）

## 狭間村諸給人中

〔史料一〕で注目したいのは、「当村（狭間村）衆中」と「狭間村諸給人中」という言葉である。鹿毛敏夫氏の研究によれば、「狭間村衆」は狭間村に住む一般民衆、「狭間村諸給人」は狭間村の大友家臣団をさすことが指摘されている<sup>⑤</sup>。また、「狭間村諸給人」に関して、別の史料では「狭間村寺社諸給人」とも称されている<sup>⑥</sup>。狭間村諸給人の構成に関する史料としては、「阿南荘松富名北方四百貫分目録」<sup>⑦</sup>がある。この史料に登場する人名をまとめたのが、次の表である。

（表）阿南荘松富名北方四百貫分目録に登場する人名一覧

寺社層	武士層
休庵(領)	田吹弾正忠
(由原)後藤	田吹新左衛門
慶生庵	田吹左馬之
大圓寺(瑞光寺領)	吉弘右衛門
めうこん寺	賀来藤十郎
	雄城宮内
	園之田右馬助
	指原
	志賀藏人佐
	大津留主税
	吉弘弥十郎
	小田原入道
	佐藤刑部
	(御南)以前領
	美濃守
	右衛門大夫

狭間村の北方のみの記述であるが、この史料から大友氏から給地を与えられていた給人層の内部構造のおおよその姿がわかる。狭間村の給人衆は田吹弾正忠のような武士層や柞原八幡宮の関係者である後藤や慶生庵、大圓寺のような寺院・神社層で構成されており、狭間村北方はこうした中小規模の給人たちの所領として細分化されていた様子がかがえる。

## 二 甲斐家と狭間村衆

狭間氏と甲斐家とのつながりを示す史料は次のものがある。

〔史料二〕 狭間鎮秀・鑑秀連署安堵状<sup>①</sup>

(封紙ウハ書)

〔甲斐清右衛門尉殿 鎮秀〕

狭間村北方四百貫分、竹内専道職之事、

申付候上者、領承不可有相違候、恐々謹言、

天正四年丙子

十二月廿七日 鎮秀 (花押)

鑑秀 (花押)

甲斐清右衛門尉殿

狭間氏と甲斐氏との主従関係については、二宮修二氏によって指摘されている<sup>②</sup>。〔史料二〕は、天正四(一五七六)年に狭間鑑秀・鎮秀親子から甲斐清右衛門尉殿に対して狭間村北方四百貫分の「竹内専道職」を安堵しているものである。

史料中の「竹内」に関しては領主などの館を示す地名であること

が染矢多喜男氏によって指摘されており、その屋敷の周りに廻らせられた堀の内側に竹を植えていたことに由来していると染矢氏は述べている<sup>③</sup>。「専道」とは当時の村役人の呼び名であり、天正十六(一五八八)年六月廿六日付の大友吉統袖判条々掟書では佐賀関の下級役人の呼称として弁指とともに専道の名が見られる<sup>④</sup>。

以上のことから、〔史料二〕からは狭間村北方の下級役人としての甲斐氏の地位が狭間氏によって保障されていることがわかり、甲斐氏は狭間村衆の代表者として大友氏や狭間氏のような支配者層と関わっていたことがうかがえる。

おわりにかえて

これまで、甲斐家文書から中世における狭間村の内部構造について見てきた。限られた史料からの考察であるため、狭間村衆の具体的な構成など解明できなかった点が多々あった。甲斐家文書のさらなる分析については、今後も継続していききたいと思う。

<sup>①</sup> 二宮修二「甲斐家文書から狭間氏の姿を考察」『狭間史談』第二号(狭間史談会、二〇一一年(平成二三)年)

<sup>②</sup> 三重野誠「甲斐家文書について」『史料館研究紀要』第二号(大分県立先哲史料館、二〇〇〇(平成一二)年)

<sup>③</sup> 鹿毛敏夫「戦国大名の外交と都市・流通」(思文閣出版、二〇〇六年(平成一八)年)

④ 「史料一」の翻刻文に関しては、前掲注③鹿毛『戦国大名の外交と都市・流通』九九ページにも収録されている。ここでは鹿毛氏のものを使用している。

⑤ 前掲注③鹿毛『戦国大名の外交と都市・流通』一〇一ページ

⑥ 前掲注②三重野論文史料四・五・六号

⑦ 前掲注②三重野論文史料二号。ただし、文書の継ぎ目部分が一紙目と二紙目をつないでいるものかが不明であり、文書の途中が欠けている可能性が指摘されている。

⑧ 前掲注②三重野論文史料二二号

⑨ 前掲注①二宮論文

⑩ 染矢多喜男(編)『地名覚書』一六〇ページ(いずみ書房、一九六二年(昭和三七)年)

⑪ 渡辺澄夫(編)「佐賀郷史料」一三九号史料『豊後国荘園公領史料集成』六(別府大学、一九九一年(平成三)年)